

## アニマルウェルフェアなんてやられてられない！？ (6)

岩手大学名誉教授 岡田啓司

### 【生産現場に求められるもの】

畜産分野、食の安全の確保と消費者の信頼回復という観点から、特に酪農で HACCP 方式や GAP の導入が図られている。これらは人間の都合による食の安全が全てであり、家畜の側に立った配慮がないところ、すなわち家畜をあたかも生産マシーンと見なしていることに、臨床獣医師や畜産農家は違和感を感じるのではないだろうか？さらに言えば、HACCP 方式やその認証は、生産者と消費者の顔の見えなくなってしまう関係を補完するものであり、極言すれば生産者は信用されていないということになる。家畜の QOL 向上による生産物の質的向上が HACCP 方式のベースになれば、畜産は農業ではなくなってしまう。

アニマルウェルフェアの概念は欧米を中心に広く普及し、先進国の中では日本だけが取り残された感がある。ヨーロッパでは、国による温度差や達成度の差はあるが、家畜の飼養管理のベースにはアニマルウェルフェアがあるとの認識が強い。ヨーロッパでは、牛群内での跛行牛の割合がアニマルウェルフェアの程度の指標になっている。跛行の牛が多い牛群についてはウェルフェアができていないということで、獣医師がその農家に廃業を勧告する制度もある。筆者らが近年行っている歩様の計量化の仕事もこの流れに沿ったものである。いずれ貿易自由化後には、安価な畜産物と同時にウェルフェア畜産物やオーガニック畜産物が日本に流入してくる。

これからの畜産の生き残りを考えた場合、今まで無意識にやってきたアニマルウェルフェアを意識的に行い、今後導入される可能性の高い認証制度を利用しない手はない。アニマルウェルフェアという言葉に抵抗があるなら、家畜の QOL の向上でも良い。これをベースにして HACCP 方式が導入されるのなら、生産現場も納得がいく。生産現場は輸入に対抗して消費者との確固とした信頼関係を築いて行かねばならない時期である。その際、アニマルウェルフェアと HACCP 方式は車の両輪であり、それにオーガニック認証という上乗せができれば最高である。

日本人は仏教的な生命観をもともと持っているので、欧米流の“五つの自由”などで代表されるアニマルウェルフェアの考えはしっくりこないかもしれない。

欧米の直訳で入ってきているアニマルウェルフェアを、日本的なものに生産現場の関係者で翻訳していく作業が必要である。日本の畜産と畜産農家の生き残りのために、多くの臨床獣医師がアニマルウェルフェアに正面から取り組んでもらえることを切に願う。

臨床獣医 2009 年 10 月号掲載原稿を一部改編